

植物民俗にみる地域差

— 樹種選定と植生 —

篠原 徹

はじめに

- 一 植物民俗の比較の前提
 - 二 ナラ林のムラ・カン林のムラ
 - 三 樹種選定と植生
- おわりに

論文要旨

民俗の生成・発展・伝播をにならむを単位にして、そうしたものが重合し複雑な民俗の地域性を作りあげている。この地域性を植物に関わる民俗という側面から考察するとどのようなことが基本的な問題になるのであろうか。ここではそのため単位となるムラのなかで何をどのように調査し、そしてどう比較していくのか基本的なことを抽出してみた。それは地域差を抽出する基礎作業であるが、まず植物生態学的に妥当な列島の環境区分をおこない、その区分のなかで野生植物利用体系という点から伝統的生活様式が同じように区分できるかどうかをまず調査する必要性を強調した。そのため環境区分としてカン林のムラとナラ林のムラをとりあげ、生活様式とかわりの深い植物利用体系がどのように異なっているかを抽出してみた。それは当該地域の本来の自然植生の二次林に適應した利用体系が存在することを意味している。それぞれの地域で生活様式と同等な関係をもつ植物の素材を同位素材と提唱し、その同位素材を

分析手段として逆に環境と生活の類型化を今後考えていこうとするものである。こうした同位素材と生活とのかかわりをみていくことは、いままで植物民俗が民俗の起源論や伝播論の都合のいい材料として使われてきたことに対して別の視角を提供する可能性を示唆している。それは植物民俗の研究においても福田アジオのいう「個別分析法」と同様な立場にまず立たねばならないこと的主張である。柳田国男は「鳥柴考要領」でクロモジが遙か古代にはサカキに先行する神に捧げる「香をかぐわしむ」植物と想定しているが、民族起源論への限り無き懂れを内に秘めた議論を展開する前に植物民俗と伝統的生活様式との実証的な関係を知らねばならない。そうした地域差の抽出の先に分布・伝播に関する手掛かりがあるのでないか。植物民俗の研究はその意味では極めて初步的な位置にあることを確認する必要がある。

はじめに

人が身のまわりの植物ともう少し親しかった時代には、今では考えられないような植物と人の関係があった。先年亡くなった幸田文の絶品『木』のなかに次のような文章がある。「どういう切掛けから、草木に心をよせるようになったのか、ときかれた。心をよせるなど、そんなしつかりしたことはない。毎日の暮らしに織り込まれて見聞きする草木のことで、ただちつとばかり気持ちがうるむという、そんな程度の思いなのである。今朝、道の途中でみごとな柘榴の花に逢ったとか、今年はあるしに揉まれたので、公孫樹がきれいに染まらないとか、そういう些細な見たり聞いたりに感情がうごき、時によると二日も三日も尾をひいて感情の余韻がのこる、そんなことだけなのだ。でもそうした思いをもつ元は、幼い日に、三つの事柄があったからだ、とおもう。」⁽¹⁾その三つの事柄とは住んだ土地と親の教えと嫉妬心であるが、こう述べてこの珠玉のエッセーはタイトル「藤」と故人のかかわりの秘密を順次解いていく。

そうした毎日の暮らしに織り込まれて見聞きする草木への思いがつまりらぬ感慨かどうかを諄々と説き起こしたのが柳田国男である。たとえばくさぐさの物を祭の木に付けて捧げることの各地の習俗から「黒モジ一名鳥柴という木が、何か限り無く古い歴史を、秘めて居るのではないか」と思い始めたのも是からであった」と⁽²⁾と神に捧げる木がマサキ以前にクロモジであったと想定している。これは門松や餅花に使われる樹木の分布

と習俗の形態に着目して問題を解こうとしているのであるが、その思いは最後まで続いたようで晩年の『海上の道』の最後に「知りたいと思う事二三」と題してクロモジがでてくる。⁽³⁾確かに植物はその種によって分布が限られているので、植物に関する民俗との相関をみていけばある種の文化論特に起源論や伝播論に有効なことがいえるかもしれない。

人が死ぬと線香を焚くことは日本列島どこでもみられることでありこれが仏教の影響下に成立したことであったとしても、その線香を身のまわりの植物から作ることはむしろ環境とのかかわりから生じた民俗である。南はたとえば西表ではスータブ・インタブ(和名ホソバタブ)の樹皮が線香の材料として採られていた。それは三月から四月にかけて山に採りにいき、これは売却されていたようだ。⁽⁴⁾これが四国にくると徳島県穴喰町船津ではアサダ(和名シロダモ)が線香の材料として山で採られていた。中国地方にすれば現在でも水車を使ってスギの葉から線香を作っているところがある。岡山県加茂町では付近一帯がよく手入れされた植林地帯であり、ここから採ったスギの葉を使っている。⁽⁵⁾東北地方にいけばこれはコウノキ(和名カツラ)になる。これは山形県朝日村大鳥で聞いた話であるが、昔は各家に香箱というのがあって、このなかにカツラの葉を乾燥してテッキウスという臼でついて粉にして保存したものをいれておいた。盆や彼岸に竹を割ったのにこの粉を入れ、それを灰が入っている箱に棒状になるよう落としそれに火をつけ線香にしたという。

さてこうした植物にかかわりのある民俗というのはどのように考えたらいいのであろうか。それぞれの習俗の構造と分布を調べ、それぞれ

の植物の分布との対応を調べれば何が分かるのであろうか。柳田のようにそうしたことから日本の固有信仰に使われた神樹の変遷を想定するか、あるいはこうしたことから日本の東西の文化の地域差を照葉樹林文化論として論ずることになるのか。いずれにせよ、こうした文化論を展開する場合、民俗(素材の選択から、それより上位のすべての)の類似と差異をなんらかの形で指標にしていることは疑いない。さらにその民俗の存在を伝播か適応のいずれと捉えることによっても文化論は左右される。上野和男は地域性研究の全体的な構図を学史的に整理し、研究の動向として三つの軸を設定している。すなわち第一に類型論と領域論の軸、第二に同質論と異質論の軸、第三に起源論・動態論・構造論の軸という三つの軸があり、それぞれ明らかにしたいことが微妙な差異をもっているとしている。⁽⁶⁾ また必ずしもこのように個々の研究が明確に分類できるわけではなく、異質論と起源論が共に論じられることも多いともいっている。

植物民俗の研究はこうした動向と無関係ではないが、多くはその当該地域の人々が生活のためどのように自然を開発してきたのかその背後にある民俗的知識に関心が向けられてきた。もちろんある植物についての民俗の分布がその論の中心的なものになる照葉樹林文化論(コナラ・ミズナラの水さらし⁽⁷⁾ + 加熱処理に対するカシ類の水さらし)や柳田国男による語彙の分布論(『野鳥雑記・野草雑記』にみる方言周圏論)やそれに類するものはある。⁽⁸⁾

一口に植物の民俗といってもさまざまである。たとえばミソハギのように盆に精霊花あるいは仏に供えられる花として沖縄八重山から本州ま

で広く分布する習俗もある。ユシダのように笹として八重山から四国・九州あたりまで自家製のものが作られるようなものもある。これは植物の分布がそれと対応しており当然といえば当然である。初めに挙げた線香のように線香は同じであるが、素材だけが恐らく特定の植物の多少・種類差によって異なる例もある。神に祭る木の多様性(八重山のクロトン・マサキ、かなり西日本に広範なサカキ、あるいはサカキよりさらに西日本に広い分布をもつヒサカキ、中国山地や山陰のソヨゴ、あるいは東北のスギやアスナロ)でも素材の類似と差異とその民俗的慣行の類似と差異はおのずと異なる問題を提起する。⁽⁹⁾ 植物民俗をある当該地域の自然に働きかけて開発された人々の民俗的営為の総体として捉えれば、それは当該地域の民俗分類の体系として記述され、その構造と機能が論じられることによって植物的自然と人のかかわりに関する民俗誌が可能になる。問題はその先である。民俗分類として認識のレベルで比較するか、利用体系として行動のレベルで比較するか。さらにそれらは比較的よく似た文化をもつ地域内で比較していくのか、あるいは通文化的な比較をするのか。当該地域の植物民俗誌が完成しているとして、それを比較することがどのような意味をもつか、ここで若干の試論を展開してみたい。

一 植物民俗の比較の前提

ある一種の植物民俗を認識のレベル(言語のレベル)そして行動のレ

ベル(民俗レベル)を比較して分布を論じるのは民俗事象の歴史の変遷過程に主たる関心があるからである。しかしここではそれを分布を論じるための前提条件とは考えず、それが伝播であれ適応であれ当該地域の人々が生きるために開発してきた自然に関する知識の一つであると考えておく。それは千葉徳爾が次のようにいったことを念頭においている。

「したがって、その機能的側面のうちには広義の自然環境を含めて、いわゆる地域性に対応するために生まれた民間伝承あるいは民俗知識があるはずである。海島における生物の分類とか山間における地形名称や季節知識には、この種のものが必ずある。少なくともこれまでには、そのような歴史的側面の乏しい民俗知識に、あまり民俗学徒の注意が向けられなかったことは確かであろう。⁽¹⁰⁾」

けれども千葉の述べたことは直ちに反論があるであろう。歴史的側面を民俗の伝播・変容(それはそれを受容するときの歴史的・社会的条件を含めての意味であるが)とすれば、こうしたものは植物民俗に関して認識(言語)レベル・行動(民俗)レベルいずれにも結構多いものである。たとえば語彙のレベルでは柳田が『野草雑記』のなかでイタドリについて行なったような考察である。これは周圏論という解釈を生みだした。民俗のレベルでも伊藤良吉が盆の儀礼食としてのスベリヒユの分布が植生の相違や生活様式・社会構造の相違を横断する形で沖縄から東北まで覆いつくすことを報告している。⁽¹¹⁾

ある地域の植物民俗とはこうしたさまざまなレベルのものが混在して存在するのであって、単純にその分布は植生との対応であるとか周圏的

な伝播の結果であるとかはいえない。さらに植生と対応しないもの、それは商品化されていたものが流通して植生とは対応しない分布をもつものも多い。それよりも千葉のいうこうした民俗的知識がその地域の歴史と無関係とはいえないことは明らかである。逆にこうした知識こそその地域の歴史と深く関わるのではないのか。千葉のいう歴史とは何かと反論したくなる。このことは後に少し議論するとして、こうしたことを論ずるための基礎的な条件について考えてみよう。

歴史的側面の乏しい民俗とはその地域の自然環境とのかかわりで開発されてきた適応としての民俗とすることができる。当該地域の植物利用体系は植物の用途別に類別することができる、それは山田によれば七つの項目に分けることができる。生計維持・住・衣・工芸及び特殊用途・⁽¹²⁾ 菜・儀礼や忌避・娯楽の七つであるが、それぞれさらに細目に分類することができる。それらは当該地域をかなり狭い範囲にとったとしても数百種に及ぶ植物がリストアップされるであろう。市街地なら別であろうが、平地農村・山村あるいは漁村であっても沿岸漁業のような伝統的な漁村では字のような単位(藩制村)でも数百種は挙げる事ができる。むしろこうした民俗知識は個人性があり、民俗として斉一性をもつと思われる最小の単位のなかでも異なることがある。植物民俗の利用体系としてできるかぎり均一性をもつ単位で可能なかぎり植物民俗誌を手に入れることができたとして、それらを地域によって比較することでどのような問題点があるのであろうか。

千葉のような立場をとるとすれば、こうした植物民俗のありかたを上

野がいりさまざまな地域性の論議をする以前にどう環境のなかの利用体系であるのかをまず注目するのは当然であろう。植生のなかでの利用体系は聞き書きとしてとれる範囲の時代での体系であるので、当然それは現存植生に近いものであるはずである。日本文化の起源論と植生とのかかりはいわゆる照葉樹林文化論において不可欠な関係として論じられているが、そもそもそれは潜在自然植生と文化要素の対応であって、潜在自然植生が現存植生に変遷してきた過程と民俗との関連を論じているわけではない。生活様式のありかたがさまざまであっても、伝統的な自然と人の関係が密接で完成されたものとみなしうるものを地域的に比較するというのが基本的な前提条件であろう。

ある文化要素の分布を日本列島の地図上にプロットするとき平面上での東西の分布ばかりではなく、それを高度による分布を考慮に入れれば必ずしも東日本・西日本の相違ではなく平地と山の相違の場合もあるであろう。それゆえ縄文遺跡の密度の薄い、高度の高い山村にアク抜き技術が存続しているわけだから、高度という点からみれば必ずしも民俗と遺跡は対応せず、山村のアク抜き技術は縄文以来の伝統という根拠はならぬ確かなものではない。

さて日本の環境を植物的自然から類型化するとすれば図1のようになるであろう。これは暖かさの指数と寒さの指数をもとに植物学的に現存植生を類型化したものである。暖かさの指数・寒さの指数はいかなれば積算温度を指標にしているわけだからその地域の緯度と高度に植生を対応させたものである。したがって類型化はほぼ東西の軸・南北の軸によ

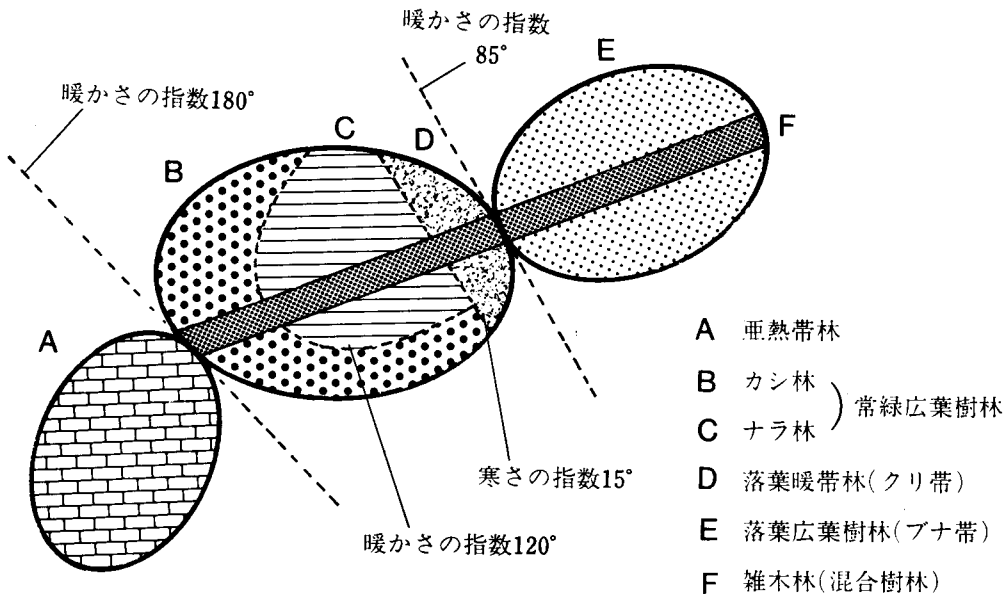


図1 民俗と相関をもつと思われる植生モデル

って地域的なまとまりをみせるが高度という点ではそうした軸では分かれられない。この植生区分は植物学的な根拠をもつものだが、多くの日本文化論のなかで使われてきたことでもわかるように、日本の伝統的な生活様式と深い関連があると想定されているものである。おそらく自然と人間の関係から風土を論ずるときにも相関がでてくると予測される。

しかしこれは縄文海進以後現在のような海岸線になった列島の潜在自然植生ではなく、それ以降の人の自然に対する働きかけを考慮に入れた現存植生のモデルである。つまり今西のいう混交林、これは雑木林といっていると思うがこれが常緑広葉樹林(照葉樹林)から落葉広葉樹林に広く展開していることが大きな特徴である。¹³⁾簡単にいえば九州から東北まで雑木林は広がり、それは人と自然の関係で歴史的にできあがったものであろうという想定である。おそらく植生の占める面積としては現在もっとも大きいものである。農耕地の周辺や雑木林のように植生の区分とかなり無関係に出現する種もかなり多いことでも分かるように植物学的な区分と人々の野生植物利用体系の地域的な区分とは必ずしも対応しないかもしれない。いやむしろそのことこそまず明らかにしなければならないことであらう。

日本の植生を暖かさの指数・寒さの指数(温度指数)で大きく三つに区分することは妥当であらう。¹⁴⁾暖かさの指数一八〇以上と以下で亜熱帯林と常緑広葉樹林を分ける。暖かさの指数八五以上と以下で常緑広葉樹林と落葉広葉樹林(温帯林あるいはブナ帯林)に分ける。それぞれその植物社会を特徴づける構成樹種もかなり異なるので、こうした環境だけ

が周りに存在するとすれば植物利用体系も相当異なるであらう。しかし図1にみるように常緑広葉樹林と落葉広葉樹林にはむしろ人の生活にかなり直結した混交林つまり雑木林が貫徹していてその面積もおおきく人の生活場所との距離からいっても近く、これは野生植物利用体系の民俗学的な問題を考える上ではその意味は大きい。さらに常緑広葉樹林は下位の区分として三つに分類できる。それは暖かさの指数一二〇以上と以下で分けるもので、便宜的にカン帯とナラ帯とに区分する。¹⁵⁾カン帯は海岸型の常緑広葉樹林であり、ナラ帯は内陸型の常緑広葉樹林である。前者は九州・四国の低地、後者は中国地方・四国の高地がそれに相当する。常緑広葉樹林はそのなかで寒さの指数が一五以下になる地域は構成樹種がかなり異なり別に分けるべきであるという植物社会学的な考えがある。それは落葉暖帯林つまり通称クリ帯といわれる地域で中部山岳地帯である。つまり北海道を除き、植生の大きな三つの区分、そして常緑広葉樹林をさらに下位区分して三つ、それに人為とのかかわりの強い混交林(雑木林)の七つに区分しておけば野生植物利用の体系的な地域的偏差を問題にするときには十分であらう。

一一 ナラ林のムラ・カン林のムラ

設定した七つは植物学的な区分であるが、そうした植生が人々の伝統的な生活とどのようなかわりをもっていたのであろうか。これを山村社会の野生植物利用という観点から比較してみよう。もとよりそれは七

つの植生のなかで条件の似た七つの地域を選び同じ方法により同じ精度の調査がされていれば望ましいが、それは極めてむづかしいことである。筆者の調査による二地点を比較するにすぎないが、自然と人のかかわりの民俗学的な地域性を抽出する基礎的な作業として何が問題になるのかを提出することができるかもしれない。

岡山県真庭郡湯原町粟谷(戸数三十一軒)は標高五〇〇メートルに位置し、西に耳スエ山(一一〇三メートル)、北に岩倉山(一〇六五メートル)など中国山地の高い山に囲まれたところで高度八〇〇メートルを越えるとブナ林が出現する環境である。集落のまわりは二次林とスギ・ヒノキの官公造林が占め、二次林にはカシワ・クリ・クスギ・コナラ・ミズナラ・ナラガシワなどがある。比較的高い場所は先の植生の類型からいえば、落葉広葉樹林の自然林からその二次林になったところである。集落周辺の低いところは常緑広葉樹林の二次林アカマツ・コナラ群集が占めている。つまり集落周辺は常緑広葉樹林のなかのナラ地帯に相当し、その周囲をブナ帯林の雑木林が覆う関係に位置する。

いま一つは徳島県安喰町船津(戸数四十六軒)で、ここは海岸からわずか十キロメートル入ったところでやはり周囲は千メートル級の山に囲まれたところである。ここは典型的な常緑広葉樹林のなかのカシ地帯であり、シイ林を伐採してもシイ林になってしまっまさに典型的な照葉樹林を環境としてもっている。植物社会学的なレベルでいうと海岸部から高地にいくに従い自然林としてはウバメガシ群落・スタジイ群落・ツガ群落が出現する。集落の周辺はスタジイ群落の二次林シイ・カシ群落が

多い。どちらも山間部の小さな谷間に水田を開き山仕事の多かった村である。両地域の野生植物利用体系・社会構造などは既に述べたことがあるので必要なこと以外省略する⁽¹⁶⁾。

どちらの地域もさまざまな野生植物が利用されており、粟谷では一九七種、船津では一五一種の野生植物が利用されていた。これはまずそれぞれの地域で植物採集を行い、それを基に植物学的な同定を行い、それをインフォーマントに見せて方名の採集を行った。したがって同一種が二つの方名を持つこともあるし、一つの方名が二つ以上の種を表わす場合もあり、方名と和名の数は必ずしも対応しない。こうして得られた野生植物利用を利用形態によって分類すると食物・建材・農具・薪炭・生活用具・子供の遊びなどに分類できる。そのなかで食物・薪炭・子供の遊びを除き山村の農耕生活に欠かせなかった生活用具の素材としての野生植物利用を比較してみた。

表1に示した三十四種の植物がそれである。この表における樹種(草木も含む)の並べ方にはかなり作為が施されている。つまりまず両地域の野生植物利用のなかで船津(カシ林のムラ)にしか存在しなくて利用するもの、粟谷(ナラ林のムラ)にしかなくて利用するもの、両地域に存在し利用するものに分けてみるとどのような傾向があるのであろうか。船津にしかないものはシラカシ(和名シラカシ)・ウマメ(和名ウバメガシ)・ソバノキ(和名カナメモチ)・シイ(和名スタジイ、イタジイ)・サルタ(和名ヒメシヤラ)・クロガキ(和名トキワガキ)・アスナラ(和名アスナロ)・マキ(和名コウヤマキ)・コシダ(和名コシダ)・コッコカズ

表1 両地域の生活用具の素材比較 (rは稀なことを示す)

夏緑広葉樹林帯 (落葉広葉樹林帯) 岡山県湯原町二川, 粟谷			常緑広葉樹林帯 (照葉樹林帯) 徳島県穴喰町, 船津			
用途	方名	有無	和名	有無	方名	用途
		-	シラカン	+	シラカン	鎌の柄, 手斧の柄, 杵, 鎌の柄, 唐臼の刃
		-	ウバメガン	+	ウマメ	船の櫓
		-	カナメモチ	+	ソバノキ	杵, カケヤ, 藁打槌, 展根替の針, コマン
		-	スダジイ	+	シイ	鎌の柄, 湿気のあるところの建材
		-	ヒメシヤラ	+	サルタ	杵 (木肌を残す)
		-	サカキ	+	サカキ	山川鎌の柄
		-	トキワガキ	+	クロガキ	小物鉈鎌の柄
		-	アスナロ	+	アスナラ	柱, 家の土台
		-	コウヤマキ	+	マキ	棺桶
		-	コンダ	+	コンダ	釣籠, 物入れカゴ, ミソコシ
		r	サルナン	+	コッコカズラ	山の橋の結束, 屋根替の足場, イシモッコ
		-	ツズラフジ	+	ツズラ	下駄の緒, 竹帚の結束, 箕, ウナギカゴ
		-	シュロ	+	シュロ	蓑, 牛の道具
鎌の柄	(ミズ)ナラ	+	ミズナラ	-		
肥負カゴ, タモの粹	フクラ(シバ)	+	ソヨゴ	r		
鉈・鉈の柄, 杵, 藁打槌, 餅花	ウツキ	+	ヤマボウシ	r		
床框, 杵	サルスベリ	+	ナツツバキ	r		
ガマコシゴ, タメッコなどガマ細工	ガマ	+	ガマ	?		
湿気のあるところの建材, オオアシ	クリ	+	クリ	r		
鉈袋, 蓑などの繊維	ヤマカゲ	+	シナノキ	r		
牛の鼻ぐり	ガヤ	+	イヌガヤ	r		
床框, 臼, ヨウジバン(洗濯)	ケヤキ	+	ケヤキ	+	ケヤキ	床框
カンジキ	チナイ	+	エゴノキ	+	カサダ	糸巻き, タバコ入れ, 小刀の柄
	クワ	+	クワ	+	クワ	鋤の柄
カンジキ, タモの粹	コーカイ	+	ネムノキ	+	ネムタ	鋤の柄
草履類の繊維	ヤマオ	+	クサマオ	+	チョマ	繊維
マナイタ (特に魚料理用の)	ホウ	+	ホオノキ	+	ホウ	マナイタ, タチイタ
蓑	ヒロレ	+	ミヤマカンスゲ	+	ミノワラスゲ	蓑
結束	フジカズラ	+	フジ	+	フジカズラ	フジモッコ, 結束
棺桶	マツ	+	アカマツ	+	マツ	臼
棺桶, 建材, イモグルマ	スギ	+	スギ	+	スギ	定木, 架木, モミホシ
手斧の柄, 唐臼の刃, 牛犁の床	エンズイ	+	イヌエンジュ	+	エンズ	唐臼の刃, 牛犁の床, マンガの床
木馬のソリ, ユキオロン	ヤマザクラ	+	ヤマザクラ	+	ヤマザクラ	マナイタ, タンス

ラ(和名サルナシ)・ツツラ(和名アオツブラフジ、和名オオツブラフジ)・シユロ(和名シユロ)であるが、この地域の特徴がよくでていいる。つまり照葉樹林帯およびその二次林に特徴的な植物が多いといえる。

それに対して粟谷のほうはどうであろうか。ナラ(和名ミズナラ)・フクラシバ(和名ソヨゴ)・ウツキ(和名ヤマボウシ)・サルスベリ(和名ナツツバキ)・ガマ(和名ガマ)・ヤマカゲ(和名シナノキ)・クリ(和名クリ)・ガヤ(和名イヌガヤ)であるが、これらはガマ(これは湿地に多い植物で粟谷の地形的特徴を示すもので例外的である)を除けばやはり常緑広葉樹林帯とその二次林を特徴づける植物が多い。両者に共通する植物を和名で記すとエゴノキ・ケヤキ・クワ・ネムノキ・カラムシ・ホオノキ・カンスゲ・ノダフジ・アカマツ・スギ・イヌエンジュ・ヤマザクラの十二種である。前述したように常緑広葉樹林は温度指数で一二〇を境にして二つのタイプに分類できる。カシ帯とナラ帯であるが、この二つの二次林はいわゆる人里の周辺にある雑木林でその構成樹種はよく似ている。つまり今西錦司のいう混交林であり、ここそが共時的にも通時的にも日本の農耕文化を育んできた母胎ともいえる場である。これを今西の言うように一種の極相林ととらえるか、また人と自然の交渉の結果としての常緑広葉樹林の二次林ととらえるかは植物学者の意見の分かれるところであろう。弥生時代以降こうした雑木林が人々の生活圏の回りを覆っていたのはまちがいないであろう。

今両地域の生活用品の素材から二地点を比較しているけれども、これを野生植物の利用体系全体、つまり食物・儀礼・遊びなどにわたってみ

てみればこの雑木林を起源にする植物が多い。照葉樹林文化論に登場する野生堅果類の種類と調理における東日本と西日本の差異も日本列島鹿児島から青森までどこでもみられる雑木林の上に成立した農耕文化の単なる適応の地域差と考えてもならぬ不都合はない。こうした野生堅果類利用を前提とした高度な定住的縄文文化の前段階として照葉樹林起源のクルミ・ヒシ・ドングリ・クリ・クズ・ワラビ・テンナンショウなどの(17)アク抜き技術に裏づけられた生業経済の段階が想定されている。しかしこれなどもなにも照葉樹林起源のものというよりむしろ雑木林のものであり日本列島の人里周辺に広く存在しているものである。それに民俗学は前代の生活の歴史学が叙述しなかった部分に照明を当てるといふ柳田国男以来の初志という観点からいえば、いつも歴史学から攻撃されながらも主たる舞台はいつも「前代」であって「古代」や「先史」の時代ではない。多くの民俗的現象はどう時代を遡源させても中世までというのは一種の不文律のようであるが、野生植物利用の採集技術・調理技術の民俗だけが一気に時代を遡ることができるとどのように証明できるのであろうか。少なくとも中世以降の野生植物利用(堅果類のアク抜き技術など)に東日本・西日本の差異があることは認めたとしてもそれがどうして縄文時代以来連続として続いたものの差異として検証できようか。しかも焼畑をする山村として照葉樹林文化論からいえばまさに縄文時代の残存した地域というのは標高はかなり高い地点(椎葉・祖谷・椿山・白峰・北上山地など)にある。そこは照葉樹林帯というより落葉広葉樹林帯に近く、わずかな縄文遺跡の存在はあっても密度は低地や低山帯に

比べ少ない。そして人々の伝承や文書によればせいぜい中世に人が住みついにすぎないところが多い。焼畑文化が稲作文化に先行する農耕文化とすれば、そしてそれが列島外からの文化の伝播であるとするなら当然低地の縄文時代の遺跡には密度ばかりでなく遺跡の性格のうえでもそれが焼畑を示すものでなければならぬが、それは考古学的には必ずしも妥当であるとは言えない。したがって起源や伝播の問題を別にすれば焼畑をする山村というのは中世以降なんらかの理由で山に住みついて周囲の落葉広葉樹林に適した生業である焼畑を取り入れた村であると考えるべきであろう。それは環境に適応するという民俗学的問題なのではなからうか。むろん対島のように海岸に近い村が焼畑を行っていたところはあるが、これは系譜が異なるかあるいは隔絶した島という条件によって残存の特殊な形態かもしれない。環境に適応する民俗という側面をもう少し微細な点で眺めてみよう。

三 樹種選定と植生

両地域の植物社会学的相違を示したのが表2である。粟谷で五地点、船津で四地点をとり、それを植物社会学で使うブラウン・プランケ法にしたがってまとめたものである⁽¹⁸⁾。これは地点と植物の種の縦・横の軸を操作して植物の種のあるままとまりを作ることによってその土地の植物の構成の特徴を抽出する方法である。ギリシャ数字はそこにおけるその植物の出現頻度を表現している。これはその土地の植物社会学的な環境評

価を示しているものであり、こうした操作を多くの地点で行なうことによって植物社会の類型化を行なう基本的作業となる。植物社会はクラス・群団・群集・群落によってレベルを分けている。植物社会の特徴を系統分類して、レベルが高いほど植生の抽象度は高く個別の種の分布の特徴は希薄になる。その意味では落葉広葉樹林帯・常緑広葉樹林帯(照葉樹林帯)というブナ・クラスやヤブツバキ・クラスとの関係だけで個々の植物の民俗を論じるのは危険である。

aは粟谷にみられるブナ・クロモジ群集で、bはその二次林であるミズナラ・クロモジ群落である。この植生を特徴づけるa・bにでてくる植物は前述した粟谷の植物民俗の利用体系とは構成種が異なるようにみえる。けれどもそれはとりあげた生活用具が利用体系の一部であるからである。ブナ以外の植物はさまざまな形で利用されている。クロモジは方名でもクロモジといわれ餅花の木としていまでも使われている。また伝承ではかつては妻楊枝の木の材料として採取して売りにだしていたともいう。それには買い付けにくる人がいたという。クロモジは香りの高い木で、これから香料を絞りとったという伝承もあるが実際に行なったり見たたりした人はいない。各地でそれは聞かぬが伝承のなかでもこれなどは伝承の尻尾だけで消えかかっているものといっていだらう。粟谷ではロシアブナはタカノツメと同じ方名ボカをもち経木の材としてやはり採取して売りにだした。ヤマボウシは方名ウツキといい利用体系にもでてくるが極めて重要な木であつたらしく鉞・鉞・鉞・杵などの柄として利用度は抜群であつた。槌などは木地師に作ってもらつたという。餅花

表2 粟谷・船津両地域の現存植生（常在度表）

調査地点(クウォードラート)	粟谷				船津					
	ブナクラス		ヤブツバキクラス		ブナクラス		ヤブツバキクラス			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
* ブナ	V	V	V	III			a			
* クロモジ	V	V	V	V			b			
* コシアブラ	I	I	IV	V	IV	V				
* ミズナラ	II	III	II	III			c			
* チマキザサ	I	IV	III	II			d			
オクノカンスゲ		II	IV	III						
ハイイヌガヤ	I	II	IV	II						
ツノハシバミ	I	I	III	IV						
* エゾユズリハ	I	II	II	III						
* ホオノキ	I	I	II	I						
ヤマボウシ		II	I	I						
ミヤマカンスゲ	II		II	II						
ヤマブドウ	I		I	I						
マンサク	I	I	I	I						
マツアサ		I	I							
シナノキ	I									
スギ			I							
タニウツギ				III						
ヒサカキ	I		I							
ウラジロ					V	V	II	IV	IV	V
* アラカシ					II	II	II	II	V	IV
* サカキ					III	II	II	II		V
コシダ					I	II	V	V		II
カナメモチ					II	I	I	V		III
* ネズミモチ					I	I	III	III	II	IV
* ヤブツバキ					I	II	III	II		II
ヤブコウジ					I	I	V			III
アカガシ					IV	IV				I
* テイカカズラ					I	r	II	II		I
* ヤブニッケイ					I	I		III		I
シラカシ						III		II		II
* マンリョウ					I	I				
* シロダモ					r					I
ウラジロガシ					I	r		I		I
イヌビワ										
アカマツ					V	V				
ヤブツツジ					V	V				
コバノミツバツツジ					V	V				
ソヨゴ					V	V	II	I	II	I
コナラ					V	V				
イヌツゲ					V	V				
ワラビ				III	V	IV				
タカノツメ					V	III				
クリ					IV	III				
ヤマザクラ					III	IV				
コウヤボウキ					III	III				
エゴノキ					II	IV				
ススキ				II	III	III				
ネムノキ					II	II				
アオツツラフジ					I	II				
ツガ							ツガ林			
アスナロ							スタジイ・タイミン			
* スタジイ							タチバナ群落			
* タイミンタチバナ										
タブ										
クロバイ										
ウバメガシ										
トキワガキ										
ヤマモモ										
ネジキ										
リョウブ	V	I	I	II	V	V				
		II	II		IV	IV				

a : ブナ=クロモジ群落
 b : ミズナラ=クロモジ群落 (aの二次林)
 c : スタジイ群団
 d : アカマツ=コナラ群落 (内陸型カシ林の二次林)
 e : シイ=カシ群落 (cの二次林)
 * : クラス・群団の標徴種

I~V : 常在度
 r : 常在度5%以下

ツガ林
 スタジイ・タイミン
 タチバナ群落

ウバメガシ群落

木としても使われた。実も山仕事などでよく採られて食べられた。またシナノキは方名ヤマカゲといわれ鉈など山仕事用の道具を入れるもの素材として重要であった。

以下省略するが、いずれにせよこうした環境は高度に利用されていたといつてよい。ただこうした植物民俗にヤマボウシに代表されるような山村生活のなかで自給自足的な民俗とコシアブラ・クロモジのように商人など仲買人が介在して流通する民俗のあるところは注目しておくべきであろう。

粟谷のもう一つの植物社会の大きな構成要素はdに表わされるアカマツ・コナラ群落である。これは照葉樹林帯の植物社会学的表現であるヤブツバキクラスの低位の単位である内陸型カシ林の二次林として成立しているもので、いわゆる雑木林である。つまりこれは船津で典型的にみられるcのスタジイ群団の二次林である。船津では典型的な照葉樹林であるため伐採などの人手が加わってもこの種の二次林はあまり成長しないことがこの表から読み取れる。もちろん全くないわけではなく、この表の調査地が四地点のため、この地域の植生を十分表現していないからである。

いずれにせよこの植生の対比は野生植物の利用体系にも反映している。それは植物利用体系の両地域の、粟谷に存在する植物に対応する船津の植物をみてみるとこれが明瞭である。ソゴヤクリなど雑木林の代表的なものは船津ではまれにしか出現しない。この内陸型カシ林の二次林アカマツ・コナラ群落の代表的構成樹種である植物はいずれも粟谷におい

ては山村生活を維持するのに重要な植物たちである。

アカマツは家の土台木としてよく使うし、また特殊な用途として刃物産地として著名な播州三木の鍛冶用の松炭を作り売買していた。ソゴは方名をフクラシバといいこの地方では神に供える木として使っている重要な木である。コナラはナラといわれ家庭用の黒炭、あるいは椎茸の櫛木として使う。前述したがタカノツメは方名をイモギといい、経木の材として売っていた。ヤマザクラの木はその材の滑りやすさから昔木馬道のそりとして、あるいは雪降ろしのコシキの素材として有用である。

エゴノキは方名をチナイといい、これは粟谷周辺に定住した木地師たちが器物の素材として重宝した。ネムノキは材のしなやかさを活用しかんじきなどに使われた。方名をコーカイという。

注目しておきたいのはワラビでそれはシズラとも呼ばれるがゼンマイと共にアク抜きをして保存食料とされたが、船津では意外にこれが少ない。つまり典型的な照葉樹林ではワラビは少なく、逆にクズは多い。標高の高いところではクズは少なくワラビが多く、低いところではクズは多くワラビは少ないという植生上の特徴は照葉樹林文化論や縄文時代の植物食を考える上では無視できない。

粟谷の植物社会学的特徴と野生植物の利用体系の関係は以上のようにであるが、今まで述べてきた落葉広葉樹林・照葉樹林の二型とその二次林・混交樹林(雑木林)のいずれにも分布する汎島の植物もある。それが表の最も下にあるネジキ(粟谷では方名カシホン)、船津では方名カシヨシヨ)やリョウブ(粟谷では方名リョウボウ、船津では方名ギョウ

ブ)に代表されるものである。木本より草本の植物には多いと思われる。野生植物利用は特定の植物の性質に着目して分類・利用される。

所与の自然環境のなかである植物が選択的に採集されるためにはさまざまな理由がある。そして使われる目的によって採集の基準もその後の調理や加工も当然異なってくる。採集のおもな目的は食物・道具の素材・薬そして換金の素材であり、植物利用は生活上からくる条件に制約を受ける、それはまた同時に当該植物の生態的条件や量の多寡によっても規制を受ける。生活上の条件はそれが自給の目的をもつ野生植物の利用の民俗であったのか、換金を目的にした民俗であったのかは明確にする必要がある。換金のための採集には粟谷におけるヤマボウシやホオノキ・イヌエンジュなどがあり、これらは木地師に売りさばっていたものである。またクリなどは鉄道が普及・拡大していくなかで枕木として需要が高かった時代には換金の素材として盛んに採集された。当該社会を越えた範囲で流通する民俗は、その社会が全体社会のなかでどのような存在したのかあるいは対応してきたのかを知る手掛かりになる。そしていずれの場合にも着目した素材の特性はまた選択の大きな理由である。これを樹木に限って考えてみるとおよそ次のような特性が森林や林を構成する多くの樹木のなかで民俗的な弁別指標として挙げられるであろう。そしてその特性が農具などの素材としてどのように生かされているか粟谷の場合を一例ずつみてみよう。

水に強い——クリ(湿気のあるところの建材・湿田で使うオオア

シ)

曲げやすい——チナイ(和名エゴノキ)(雪のなかを歩くときに使うカンジキ)

硬い——エンズイ(イヌエンジュ)(唐臼の刃、牛鋤の床)

繊維がとれる——ヤマカゲ(シナノキ)(鉈袋を編む・蓑の材料)

ねばりがある——ウツキ(ヤマボウシ)(葉打ち槌・杵)

やわらかい——ホウ(ホオノキ)(まないた)

虫がつかない——カシホシ(ネジキ)(稲を干すハザ)

滑りやすい——ヤマザクラ(木馬のそり・ユキオロシ)

木目がいい——トチ(トチノキ)(ちぢみ目の盆)

これらのなかには一つの特性だけに着目しているのではなく、複数の特性が重なり利用されるものもある。たとえばヤマカゲ(シナノキ)は繊維がとれるという性質に加えてそれが水に強いということが山仕事で使う鉈袋や蓑の材料として重宝される理由である。またこれ以外にも着目する特性はあり、たとえば粟谷であれば樹皮を魚毒として用いたサンショウとか実を魚毒に使ったエゴノキなどはその例である。数は少ないが香りが注目されたのは妻楊枝のクロモジであろう。さて植生と野生植物利用の関係を粟谷で論じてきたがそれは船津でも同様にいうことができる。

船津の中心的植生は表2でいえばcで表現されるスタジイ群団であろう。これがいわゆるシイを伐ってもシイが生える典型的な照葉樹林である。これが粟谷に出現するのは神社の鎮守の森や人手の入りにくい斜面など限られたところである。これらより高度の高い場所にはeつまりツ

ガ林が、低いところにはgつまりウバメガシ群落が出現する。船津の照葉樹林は伐採しても同じような樹種の構成になるということは二次林とあまり区別できないということである。もちろんfやgの自然植生を構成する樹種より種数は減少する。タイミンタチバナ・タブ・クロバイ・トキワガキ・ヤマモモなどは二次林のなかでは少なくなる。しかしなんといつてもcで代表される植生が船津における野生植物利用の中心である。

表2のヒサカキは方名をビシャゴという。これは当地では仏様に供えるシキミの代用品として使われる。粟谷では神様に供える木として使っていて、多くの地域でこれをどちらの代用品として使うのか異なるようである。こうした行動のレベルでの違いが分布として把握できればサカキ・ヒサカキ・シキミの植物自身の分布とそれぞれの植物の方言の語彙のレベルでの系統と分布の三つを重合することにより分布論に別の視角を提供できるかもしれない。

船津は照葉樹林のなかでカシ帯といわれるように、その常緑のカシ類の豊富さは野生植物利用のなかで粟谷と顕著に異なる側面である。シラカシ(方名シラカシ)・アカガシ(方名アカガシ)・アラカシ(方名ツボカシ)・シリブカカシ(方名シブカシ)・ツクバネカシ(方名ハド)・ウバメガシ(方名ウバメガシ)・ツブラジイ(方名シイ)の七種が存在しそれぞれ利用が異なるのは表2のとおりである。カシ林のムラと表現する根拠はここにある。この地域でカシ類(上記の七種どれでもいいが、シラカシとウバメガシが多い)からカシノモチといって水晒しだけで作る救荒

食はやはり水晒しをして澱粉を採取するキカラスウリ(方名グドウシ)と同様興味深い。照葉樹林文化論やブナ帯文化論で列島の東西で採集・狩猟段階の縄文時代の食糧資源の多寡がよく論じられるが潜在自然植生が当時の自然植生であったと仮定すればそれほどの差異があるとは思われない。船津がどれほど古くからの村かわからないが、そしてこうした技術がどこから伝播したのか開発されたのかも明確ではないが、人為の相当加わった照葉樹林の二次林のなかで野生植物からの食糧獲得方法としてかなり長く続いてきたのは間違いない。しかしやはり中世以降のことであろう。起源や伝播はともかくとして植物民俗を山村が救荒食などをまわりの環境からどのように開発して適応してきたかという観点からまずはとらえたい。比較的諸条件を整理すべきである。

カナメモチ(方名ソバノキ)は照葉樹林の典型であるがこの樹木の有用性は表1で明らかのように杵・藁打槌・屋根替の針などいろいろ加工される。その着目された特性は樹木にねばりのある点であり、これは粟谷におけるヤマボウシ(方名ウツキ)に匹敵する。この樹木の特性を粟谷と同様に次にみてみよう。

水に強い——シイ(和名ツブラジイ)(湿気のあるところの建材)

曲げやすい——サカキ(川で魚釣り用の餌のエビをとるタモ)

硬い——シラカシ(唐臼の刃)

繊維がとれる——シユロ(藁の材料)

ねばりがある——ソバノキ(カナメモチ)(藁打槌)

やわらかい——ホオノキ(まないた)

虫がつかない——スギ（稲を干すハザ）

滑りやすい——ヤマザクラ（箆笥の引き出し）

木目がいい——クロガキ（トキワガキ）（小物の鉋などの柄）

それぞれの地域で着目をした同じ特性でも選択される樹種が異なるのは前述の粟谷と比較してみると明らかである。自然のなかでその生態的地位が同じものをニッチ (niche) が同じであるという。それにならうていえば個々の植物がある特定の環境のなかでその生活上の有用性の地位が同じであるものを同位素材と表現してもいいだろう。植物民俗と環境との関係を論ずる時にはまずこの同位素材をそれぞれに地域で明らかにしておきたい。船津のカシ林のムラと対比して同位素材の体系的な相違から粟谷をナラ林のムラと表現する理由はここにある。

同位素材を明らかにすることはその野生植物が当該地域の生活の中でどのような役割を果たしてきたのかを明らかにすることである。そうすることで初めて植物民俗を単に使用法の類似や語彙の類似から伝播論や起源論を安易に述べることの弊害から今少し意味のあるものにする事ができる。こうした野生植物の民俗的知識は生活の戦略として伝承されてきた知識なのであって、近代化する以前の生活にとっては大変重要で使われることがなくとも非常時（飢饉や敗戦）にはいつでも伝承の伝達の行なわれるものである。この豊饒な伝承の海ともいえるべき民俗知識の束は決して伝播論や起源論に素材を提供する無味乾燥なレリックとしての民俗ではない。

その意味では福田アジオが既に重出立証法批判をしたことと同じ地平

に立ってみなければならぬ。重出立証法が変遷を明らかにすることができるというのは幻想であるとし、この破棄すべき方法にかわって福田は次のように述べる。「民俗をそれが伝承されている地域において調査分析し、民俗の存在する意味とその歴史的品格を伝承母体および伝承地域において明らかにすることが民俗学の主要な方法とされねばならない。仮にこの方法を、重出立証法に対して、個別分析法と呼んでおきたい。」⁽¹⁹⁾

このことを植物民俗の側に引きつけて述べるならば、一本の木、一つの森も、現にそこにあるあり方そのものがその地域の生活の歴史と深くかわりながら存在していることを認識することである。語彙のレベルや民俗を要素としてとりだし比較する以前に、その民俗のもつ意味をその地域の生活総体のなかで明らかにすることが比較の前提である。生活の中で植物民俗のもつ意味がまるで逆転してしまう象徴的な例を最後にとりあげておこう。

自然と民俗の関係を主題にしてここ数年、沖縄県八重山郡竹富町・黒島で調査をしている。⁽²⁰⁾ 直径四キロメートルの隆起珊瑚礁の平坦な島は現在人二百人、和牛二千頭といわれる畜産の盛んなところである。しかし、現在の姿になるまで島はさまざまな主たる生業の変遷をしてきた。特に一九四五年以降、敗戦を契機に島はそれまでの伝統的なアワ・ムギを主体にした畑作からサトウキビ栽培、タマネギ栽培を経て、もともと繫留飼で小規模に存在した畜産を放牧形態に切替え、ここ三十年ばかりではとんの畑地は放牧場になってしまった。現在なお牛肉の自由化に対して対応すべくスタビライザーという機械を使い隆起珊瑚礁を砕いて放牧

場を増加させている。環境のもつ潜在的な植物生産力を開発しているといえる。

そうした人が働きかける環境の変化のなかで方名シトウチ(ソテツ)の役割は劇的に変化した。畑作が主たる生業であった時代は早魃で水に苦しむ島でもあったが、現在は西表からの海底送水で潤沢になった。早魃の時は伝承されていた植物民俗の知識は総動員され、食料獲得の野生植物利用が当然行なわれた。ソテツ地獄で有名なシトウチはその中でも有力なものであった。ソテツは伝承によれば元来この島にあったものではなく、早魃や飢饉の時の非常食料用として島外からいつの時代かもたらされたものらしい。畑の畔に人為的に植栽されたようだ。シトウチの実を採取していい日は決められていて、ドラを鳴らして一斉にとりにいったものである。救荒食としてのシトウチの重要性は島人の多くが語る場所である。けれどもこの重要なシトウチが一転して島では最悪のものとなった。それはこの三十年間生業の主体を和牛の飼養に転じてから特に経験の浅い若い和牛が時にこのソテツの新芽や実を食べ、神経を冒され、島で「腰ふら」と称される被害をもたらすものになり脅威となったからである。「腰ふら」となった牛は正常に歩くことができないう場合が多い。肉の質がそれによって劣化するものではないというがやはりセリ市では値段は安くなり島の畜産にとってはソテツの除去は焦眉の問題となっている。

南国らしさを醸し出すソテツも島の生活者にとっての意味は救荒から害へ転換してしまった。一本の樹木が、一つの種である樹木がある環境

に存在するということはその地域のなかでの歴史と深く関わることをあることをこれは示している。

おわりに

これまでカシ林のムラとナラ林のムラの二つを例にとりながら、その地域を環境とのかかわり方で比較するときとどんなことが問題になるのか議論してきた。それは野生植物利用体系を植生との関係でみていくというものであるが、その地域の生活様式と環境との関係性の差異を表現する手段として同位素材をまず比較の前提として抽出する必要性を強調してきた。

同位素材における植物の種の相違は多くは自然環境の差異に基づく適応の問題におそらく帰着するであろう。同位素材の存在しないものについては自然環境を素材として生成するその地域の民俗の特殊性として論ずることになるであろう。いずれにせよ個々の植物の種に対する民俗をその地域の生活様式や歴史性と無関係に分布論・伝播論・起源論を論ずることはいつまでたっても民俗学が歴史学や考古学あるいは民族学に都合のいい素材を提供するだけの補助学になってしまうことを銘記すべきである。日本の伝統的生活様式がナラ林のムラ、カシ林のムラ以外にブナ林のムラ、亜熱帯林のムラなどいくつに類型化できるか今後の課題であるが、まずそのことを植物民俗を対象として民俗学を考える場合は必要であろう。

一本の木にも人の歴史は刻み込まれている。冒頭にあげた幸田文の『木』のなかに野中の一本立の太木の話はこのことを鮮やかに教えてくれる。次のようなものである。「あるとき植物のことをなにくれとなく教えて下さる先生と話をしていた、野中の一本立の太木はすてきだといったら、すてきと思うのは勝手だが、なぜ一本なのか、そこを少し考えてみなくてはネ、とたしなめられた。第一にその木は何の木かときかれ、遠見でわからないと答えると笑われた。じゃまあ仕方ないとして、その木の枝はどんなふうかという。幹は太く短くて、傘をひろげたようにみごとに枝葉が茂っていてといえは、そういうのは風景としてはすてきなものかもしれないが、材としてはダメな木だという。そんな低いところから枝が沢山でていては、ふしだらけで使いものにならないといわれた。まずはじめに樹種をたしかめ、木の形態を見、有用か無用かを考え、さらにその附近を見歩いて、同種の木の切株があるかないかに気をつければ、なぜ野っ原に一本だけ残ったか、だんだん見当がついてくるでしょ。良木良材をわざわざ一本だけ残す筈がないじゃないか、伐る手間さえ惜しむほどに人の生活は苦しいのだから、野山に一本残った木の評価はおのずと明らかといえる。人間の側からいえばそれは役立たずの無価値の木であり、木の側からいうなら、不運と苦難の末にやっと得た老後の平安というわけ、どうか一本残った木をすてきというだけで片付けしないで、もっとよくみてやってみてほしい、ということだった。身にしてみる一本立の老木の話だ⁽²⁾。」

なにげなく存在する一本の樹木もその地域の生活が刻みこまれた記憶

装置だということを我々は知るべきであろう。生活のために自然を開発して生成したり伝播した民俗つまり自然に関する知識の束、総体を比較することによってしか私たちは日本列島の自然と民俗、自然と歴史の問題にアプローチできない。

註

- (1) 幸田文『木』一九九二年・新潮社 一七〇一八頁
 - (2) 柳田国男「鳥柴要領」『神樹篇』一九五一年(定本柳田国男集・十一卷所収、筑摩書房) 一七九頁
 - (3) 柳田国男「知りたいと思ふ事二三」『海上の道』一九五一年(定本柳田国男集・一卷所収、筑摩書房) 二二四頁
- この説の当否についてはほとんど否定的であろうと思う。これについてその後の研究があるのかないのか寡聞にして知らないが、神樹として使う植物の種の多様性とその分布、及びそれぞれの種の分布などから周圍論的な様相などとは無関係であり、信憑性はかなり薄い。
- (4) 山田孝子「沖繩県、八重山地方における植物の命名、分類、利用——比較民族植物学的研究——」一九八四年(リトルワールド研究報告)第七号、人間博物館リトルワールド) 一五三頁
 - (5) 若村国夫「岡山県における工業用水車の構造と使用形態」一九八七年(『岡山理科大学紀要』第二十二号B、岡山理科大学) 一五七頁
 - (6) 上野和男「日本の地域性研究における類型論と領域論」一九九二年(『国立歴史民俗博物館研究報告』三十五集) 二四一〜二七〇頁
 - (7) 佐々木高明「縄文文化と日本人」一九八六年・小学館 六三〜八四頁
 - (8) 柳田国男「虎杖及び土筆」『野草雑記』一九二八年(定本柳田国男集・二十二卷、筑摩書房) 三五〜三八頁
- 柳田はこの中で例えば「国の両端の方言」と題してタドリの方言の周圍論的分布について論じている。
- (9) Dr. YOSHIO HORIKAWA 『Atlas of the Japanese Flora-an introduction to plant sociology of East Asia』1972 GAKKEN CO. Ltd. p218 ~ 220

日本の現存植生としての樹木・草本の五百種それぞれについての水分分布・垂直分布を詳しく記したこのアトラスには植物民俗を論じるとき重要な分布について極めて有効な情報が得られる。例えばサカキとヒサカキの分布はその好例である。それによればサカキの分布は西日本、しかも太平洋岸に多く、高度は千メートル以下に分布することがわかる。それに対してヒサカキはサカキに対して分布密度も高く、分布する範囲も水平・垂直いづれもサカキを覆うように広い。もしヒサカキを神樹としてサカキの代用として使う民俗が生成したとするならばサカキを使う文化からの伝播ということになるが単純にそのように言えるかどうか。

(10) 千葉徳爾「日本民俗の風土論的考察」一九八〇年(千葉徳爾編『日本民俗風土論』弘文堂) 九頁

(11) 伊藤良吉「盆の食物——ヒユをめぐる民俗——」一九九〇年(『博物館資料調査報告書二——民俗資料編二集——』国立歴史民俗博物館) 二七六～二九六頁

(12) 山田孝子「鳩間島における民族植物学的研究」一九七七年(伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』雄山閣) 二五二～二六二頁

(13) 今西錦司「混交樹林考」一九八五年(季刊『人類学』十六―三、講談社) 今西は混交樹林は「自然の中には、いつまでたってもいわゆる極相林にならない部分が、かなり大幅に存在する」ものとして述べていてかならずしも雑木林とは言っていない。けれどもそれは雑木林と重複するものとして考えて差し支えないと思われる。なお今西はこの中で「照葉樹林をもって日本文化の誕生地のように考えるひとはまだ照葉樹林の極相林のくらしや乏しさを実感していないひとであらう。いままでは照葉樹林の原産のようにとりあつかわれてきた茶・大豆・ウルシなどというものは、みないずれも混交樹林由来のものばかりである」と厳しい照葉樹林文化論批判をしている。この論文に対して中尾佐助・佐々木高明・吉良竜夫の三氏がコメントをしているが照葉樹林文化論に深く関わってきた人たちだけに興味深いものがある。

(14) 山中二男『日本の森林植生』一九七九年・築地書館 二二～五〇頁

この中で山中はいわゆる照葉樹林を暖温帯林といっているが、日本の植生におけるさまざまな立場を要領よくまとめている。この暖温帯林における植生を潜在自然植生からみればタブ林・シイ林・カンシ林に大きく区分し

ている。それらは相互に連続性をもちながら、分布・環境および種構成を異にしている。しかし全体としてはまとまりのある森林である。しかしそれは潜在自然植生としての区分であり、一種の理念型に近いものである。

現実の人々の生活のまわりに展開する植生はタブ林・シイ林の二次林であり、カンシ林の二次林である。この二つの境界が温度指数でいえば一二〇度である。ここでは前者をカンシ林とし後者をナラ林(雑木林)とすることに よって伝統的生活様式との関係をみていこうというわけである。

(15) 一般的にいうと照葉樹林をさらに下位区分して数型としてとらえることは植物生態学者のなかにもいて、前述の山中もタブ林・シイ林・カンシ林に区分している。

(16) 篠原徹「Ethnobotany からみた山村生活」一九七三年(岡山理科大学紀要『九号』および「植物方言と民具」一九八六年(『中四国民具学会年報』六号))

(17) 佐々木高明・前掲書 一二六～一三五頁

(18) 佐々木好之編『植物社会学』一九七三年(『生態学講座』八、共立出版) ブラウン——ブランケ法については多くの概説書が紹介されている。上記のものはその一つである。ここで実際に作成した図表は畏友である植物生態学者・波田善夫のデータを基に作成していただいたもので、氏には深く感謝する。

(19) 福田アジオ「重出立証法と民俗学」『日本民俗学方法序説』一九八五年弘文堂 一七五頁

(20) 篠原徹「記憶される井戸と村——沖縄県・八重山郡・黒島の廃村と伝承——」一九九一年(平成三年度科学研究費補助金研究成果報告「環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応」)

(21) 幸田文・前掲書 一五一～一五二頁

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

Regional Variation seen in Ethnobotany
—Selection of Tree Type and Vegetation—

SHINOHARA Tōru

Taking as a unit the *mura* (village), which has been forming, developing, and spreading folk customs, the complex regionality of folklore is brought into being by the polymerization. When examining this regionality from the aspect of Ethnobotany, what are the basic problems? In this paper, the author has tried picking out basic issues in the *mura* as the unit, concerning what should be investigated and in what way and how they should be compared. This is a basic study for extracting regional variations. The author emphasizes the necessity of, first of all, dividing the Japanese Archipelago environmentally in an appropriately flora-ecological manner, then to see whether the traditional way of life in these sections can be classified similarly with regard to a system of the utilization of wild plants. For this purpose, the author takes as his environmental divisions two *muras* with two types of oak forest (*Quercus serrata* and *Quercus glauca*); to extract the differences in the way plants are utilized, a system which is closely connected with the way of life. This indicates that there exist systems of utilization adapted to the secondary forests of the original, natural vegetation of the regions concerned. We assert that the plant materials with an equivalent relationship to the way of life of each region have the same status in its Ethnobotany, and attempts reversely to classify the environments and the way of life, by using these corresponding materials for analysis. While Ethnobotany have been used as convenient materials for theories on the origin and diffusion of folk customs, looking at the relationship between these corresponding materials and the way of life suggests the possibility of providing a different view point. This is an assertion that the study of Ethnobotany must take a stance similar to the "regional analysis method" advocated by FUKUTA Azio. YANAGITA Kunio suggested, in his "*Torishiba-kō*", that the *Lindera umbellata* was an "aromatic" plant dedicated to the gods in very ancient times, predating *Cleyera japonica*. However, before starting a discuss with the origin of Japanese culture, we should be aware of the corroborative relationship between Ethnobotany and traditional way of life. The author wonders if clues regarding distribution and diffusion can be found before the extraction of such regional variances. We must realize that the study of Ethnobotany in that sense is still at a very elementary stage.